

§1 緒 言

日本溶接協会 溶接棒部会技術委員会では昨年年度において、
オ8分科会を新設し、「硬質高張力鋼溶接棒についての共同研究を
開始した。既設のオ1ないしオ7分科会は何れも熱心に運営されて
いる。モデル棒の試作は共同の諸研究を促進し、虚偽のない活潑な
批判を可能にしている。また、ホット・スタート・アーク溶接法の
研究は着しく進展し、煙水素型被覆溶接棒の用途拡大に効果を与え
そのである。溶接スラタについての基礎研究は一段落を告げ、溶接
棒の作業性については、その定義が略々確立し、取囲による解説も
進んだ。溶接棒に関する割れ試験法の研究は困難な向題であるが、
これも次々に検討整理されて来た。「硬質円盤用被覆アーク溶接棒」
規格に関しては、原案の作戦も終り、協会をへて技術院に差出され
既に規格化が進行している。なお Airco ステンレス溶接棒について
の共同研究の成果は、国内産ステンレス棒との厳密な比較を容易に
し、国内産棒の自信を高めた。

幹事会、各分科会および本委員会への出席率は何れも高く、研究発
表並びに質疑応答は活潑に行われ、中堅技術者又は研究者の溶接棒
技術の向上に対する意欲が昂揚されている。これは後に続く若い技
術者及び研究者にも好影響を与えるものと思われる。

かくして次々に挙りつつある共同検討の諸成果と研究意欲の上昇
とは、共に当委員会の発展を意味するものであり、溶接棒界のみな
らず、本邦溶接工業界のため依ばしい次才である。

本報告には、諸分科会における共同研究の進行状況および成果の
概要が記されている。

会員会社および関係諸会社は、ここに掲載されている諸数値並び
に考え方を更に検討され、社内で一層高級な研究を推進する場合の
参考資料とされたい。

本報告は、また当技術委員会一年間の研究活動の速報とも言い得
るものであり、或部分については今後更に精細な検討を必要とする

かも知れない。しかし、当委員会はこの報告を本邦熔接関係の学界および工業界に広く贈って、遠慮のない御批判と御教示とを請い、熔接棒技術の一層の進展を期してゐない。

関係各位の御理解と御支援とを謹んで御願ひ致す次第である。

昭和34年夏

日本熔接協会、熔接棒部会、技術委員会
委員長 関口 春次郎